



里見八犬傳
九
四十六

傳
600
284



14
600
284

著作翁口授編 本篇分卷十冊
齋邑路婦代寫 内中上編五冊

八犬傳第九輯 結局圓圓上編

柳川重信畫 江戸刊行書林
漢齋英泉畫 文漢堂正鋪



八犬傳第九輯卷之四十六簡端附言
本編の題目先板卷の四十五までの總目錄の下に夙に附出せしむるを看官の
結局までを趣を知らせむ欲し一僻所為を彼六回の當日腹稿の大槩と擧げ
の。其後本編を編るふ及び豫思より長くあらざることを然らば一巻毎に定
數ありて作者の自由を倣へしむるに可からざるを以て一回と釐して或は上下或は中下と
二回三回に分ちて其數を合せしむる抑一回を釐して二回三回を倣はざるは唐山の稗史小
説の例に似る。只源氏物語の若菜の上下ありといへども本傳の源語を倣はざるは
唐山の稗史に準じ元自文漢堂の性急を羊冊稿に專ら隨て奪ひ去るを海書刊
入のふ處與を故に後に至りて不都合なるを以て先刊刻する所の五卷を發販せ
んとす。其のこれ這簡端の餘紙の事情を畧記して其責を塞ぐ而已。

天保十二年辛丑秋長月之吉

菘笠漁隱



南總里見八犬傳第九輯卷四十六第百七十回以下再出總目錄

○卷之四十六 第百七十七回

一 顆智玉途懲一騎驕將 四個保質反捉兩個保質

同卷 附録目 此段不釐回 但有附目已

建柴道場毛野謁守如墓 湯嶋茂林道節破三隊敵

○卷之四十七上 第百七十八回

有種雪恥復歸御黨 大水陸濟度眾鬼

○卷之四十七下 附録目 此段不釐回 但有附目已

里見諸將士凱旋稻村城 安房侯博愛賑隣國窮民

○卷之四十八 第百七十九回上

照文歸東房總多福 東西和睦兩國開津

同卷 第百七十九回中 附録目

義成面十二敗將 助友受秘封一匣

○卷之四十九 第百七十九回下 附録目

成孝全孝別故君 孝嗣仗義辭舊主

○卷之五十 第百八十回上 附録目

一 姬一僧死生等榮貴 孝感力藝詠歌贊奇異

同卷 第百八十回中

義成重賞功臣妻八女 初段

同卷 第百八十回下

義成重賞功臣妻八女後 信隆還任舊城免罪過

○卷之五十一 第一百八十勝回上

狐龍貽化石、大蟬脱 八行反壁八行傳十世

同卷 附録目 此段不釐回 但有附目已

信隆宗盈古江逢孝嗣 政木大全論辨引和漢

○卷之五十二 第一百八十勝回中 附録目

延命寺義成賞牡丹花 富山崖念成見遺題歌

○卷之五十三 第一百八十勝回下 附録目

犬士退隱樂天命 諸將得失備其尾

○卷之五十三下 回外剩筆

頭陀話説枕中四十八城 稗史大成本傳二十八

通計六回分回附録目共一十五回

先板九輯卷の四十一の簡端の附載。回外剩筆の題目の二十七年とあり。去
歳の冬、結局大團圓まで編果さすと思ひ故に余も作者病眼の障りありて
一棧後れか、今改正して、二十八年とす。只是のころ、一回と釐して上下或上中
下と二回三回ふ做し、今上あり。如。釐して二卷一回も、今附録目と
見せし。看官の爲、葉ふ做さん。其餘の附録目も、其巻の端ふ出さず。若
第百八十回の上一姫一僧云々の一回と第百八十勝回の中編と下編云々の回
と是の。其餘の只回を釐して二回三回ふ做さ。附録目と出さず。先案後案
同トか。ねど、首の六回を幹ゆ。附録目の枝葉をさ。此彼都合せざる。あ
る。看官訝り思へん。事。の所以を識者余也。

先板第九輯卷之四十一至四十五校閱遺漏再訂抄録

○四十一の巻 後序 于右れいれいありやうんけん

救氷死得 當の活字作下 同巻 五丁右 射朝寧 當の活字作下 同巻 六丁右

百十勝回孤龍 孤龍の孤の誤字多 同巻 九丁右 里見次磨義亮 義亮當の活字作下

○四十二の巻 六丁右 義道 道の通の誤字多 同巻 四丁左 境

同巻 五丁左 長盆 左の備訓ハキトリハ 同巻 五丁左 兵兵く字の誤

同巻 七丁左 緑林威力莊之 莊の誤字多 同巻 二丁左 窪井 窪の字の誤

同巻 八丁右 連の競 競の字の誤 同巻 三丁左 同巻 四丁左 同巻 五丁左

同巻 六丁右 同巻 七丁左 同巻 八丁右 同巻 九丁右 同巻 十丁右

同巻 十一丁左 同巻 十二丁左 同巻 十三丁左 同巻 十四丁左

同巻 十五丁左 同巻 十六丁左 同巻 十七丁左 同巻 十八丁左

同巻 十九丁左 同巻 二十丁左 同巻 二十一丁左 同巻 二十二丁左

同巻 二十三丁左 同巻 二十四丁左 同巻 二十五丁左 同巻 二十六丁左

南總里見八犬傳第九輯卷之四十六

東都 曲亭主人編次

第一顆の智玉途の一騎の驕將を懲む



却説犬山道節忠與る印東小六明相荒川太郎一清英等と共侶小千三

百餘の隊兵を寄隊水路の總大将扇谷定正の逃るを遠く追蒐る河崎矢

口の河原を迂通り又敷破り既の橋を去り了扇谷の忠臣にける巨田新

六郎助友が僅の五百の兵をねて逆安危を計り路の去向の埋伏差を見れば

道節們を遠り林をめぐ防戦ふ其鋒尖凡庸なる兵法七書父道灌の教不

仗りて奥義を極め進退を其度と稱す寡多の敵を敵する不足る武勇

由亦義秀親衛伯仲矣死本事あり且相従ふ隊長最中隼人生入永六秋

輒小紋次る。嘔傲する。煨煉毎王を資け。相戦ふ。大刀風烈。かけられ。左右を
 撃ち破れ。遊莫追隊の頭人。則是犬士。一人名高。大山忠與。折をり。蒼
 蒼君先父の怨。復果え。思ふ勢。烈火の如く。馬を縦横。馳融して。敵を斫る。
 王數と知らむ。又明相清英も。千変萬化の術を盡して。堅を摧。銳を辟。其
 隊の雄兵一人と。那進退。由らぬ。敵の隊兵。三倍。勢の爲。不殺。頼さ
 ず。助友が頼切。生入。秋。輒。多。士。卒。多。撃。捕。れて。助友も。針の外。淺
 瘡。二。所。負。ひ。是。思。ひ。け。百。あ。足。る。る。殘。兵。と。引。圍。め。且
 戦。且。退。く。三。町。許。水。際。不。敵。枯。草。と。推。分。け。踏。開。け。裏。面。入。る。と。見
 る。程。道。節。透。さ。趕。蒐。其。馬。疲。勞。れ。跌。え。撞。と。平。張。俯。を。王。を
 慌。を。騎。る。依。り。蟻。く。曹。勒。を。解。捨。て。備。下。程。も。明。相。清。英。隊。の。兵
 們。も。推。續。し。趕。逼。り。多。只。這。一。拳。助。友。を。捕。ま。せ。と。競。ふ。甲。斐。なく。

那敵豫准備あり。這頭の枯草の那方。隠し措ける。快船三艘あり。闘戦
 既難義不及。助友の殘兵。共其船。乗り。漕。江。楮。を
 離れ。前。面。の。岸。に。退。く。道。節。明。相。清。英。の。夜。視。も。透。し。觀。て。他。之。
 と叫ぶ。趕。歩。まる。船。を。矢。口。の。津。へ。折。る。敵。の。柱。方。と。目。送。り。方。中。道
 節。の。憶。も。太。息。吻。舊。の。河。原。へ。退。て。士。卒。を。聲。高。を。わ。れ。兵。每。助
 友。奴。の。豫。より。活。路。造。り。逃。れ。那。奴。の。我。志。を。敵。の。憶。不。定。正。王
 徒。僅。二。三。騎。の。矢。口。を。渡。り。果。ぐ。も。我。馬。疲。勞。れ。敵。死。も。其
 頭。敵。の。乘。二。番。馬。あり。索。り。て。牽。り。せ。と。焦。燥。叫。ぶ。を。
 明。相。清。英。左。右。も。急。に。推。林。示。め。且。諫。る。大。山。大。人。叫。び。弱。冠。る。我。們。が
 詞。亦。く。賢。達。て。意。見。を。舒。る。鳥。濤。を。釋。迦。説。經。孔。子。の。語。道。の。諺。も
 似。て。ひ。とも。既。小。館。の。御。軍。令。逃。敵。の。追。棄。よ。と。ある。御。條。目。を。定。め。り。決。定。正

主の大人の為不舊君先考の仇と既小の春高暇多那人の頭鎧を射と
 落して怨を復しぬふの仇を又今日其子朝寧と遠箭不被て射ぬ
 事十二分の首尾多飽て敵地小深入る夜を犯りて還ると云れぬ
 甚麼ぞ言憚ぬも只是千慮の一失然云省再思あま欲いと詞瘠片あ
 論言と道即听々含笑現われ其理あり実の今日の闘戦は是西館の奉
 為と我私の所以るも定正の敵の魁首と今根と断て葉と枯らさる後
 又忠と做え然館の御軍令の仁義を旨と云ぬ一方將者若の詔救も
 用ひる所ありと云ふ是れ御軍令と出され時我又館小請多て信と議稟
 あり然と仁の一字小泥を那宋裏の故轍と踏む世の胡慮するんを云れぬ
 和殿の意見も亦金玉今夜と犯して敵地入りて人馬の疲勞と思ひ又助
 友相似る敵の援兵出る來の後悔其里違ふらん鄙語云云云感ふる子小

浅瀬を教らうと我上アをありれとつ呵々とうち笑へ明相清英歎いて弱冠
 する我が愚意を稟一試し海容ある公私の幸入還る多と云母と道節
 答々然と我憶ふ妙真音音曳多單即保質小捕入られ五十五子の
 城小在るべ然と定正城小還ら他第の必殺され且河崎まで退れ又城
 向謀見より那里の虚実を覗き翌の早夫小推寄く徑小城と攻落して四
 個の女子を救ひ合ふべとの多をあるゆゆとの不明相清英ハ再談及む諾る
 ひつ俱小士卒と従ふ灰小見八日月の影を燭小河崎邊る故の馬頭上小
 退く程小馬淵場九郎の殘黨と首と那這の俠客野武士の每里見の徳を慕
 ぶ者招ぶる小走集ひて皆道節の隊小附一夜の向小道節の軍威の壯
 中従兵新舊ち合せて三千餘名小作りけり案下某生再説扇谷定正を
 大山道節小追逼られて既小必死の窮難作りと云裏小憎しと思ひる巨田新

安房下總を水陸より攻伐するに急るれば身の危殆を防ん為小軍師胤智と
 防禦使忠興と禮儀を以て水路の勝負を試み天道へ順を祐けて不義の驕
 慢を罪責所以也小兵を以て大敵小克工を以て大至れ然るを義成戦い負ふ
 馬前小命を乞ふとも管領饒るんや人をも身をも思ふ阿容る言を執
 听く免避莫義成仁君之安房へ俱一まわるとも御命不及怒るもあは疾々立
 せぬねと謹促して饒るべ定正竟小脱る路を敵一雲雲時の暇を請る腹を
 研らんと坐を占ると憲儀急推禁めて又叫びて領せて又復目小向ひくわらう
 既小和殿の稱者如く安房侯義成実小仁君る人殺し七已と利きと豈然
 びあらんやあとの懐君みづと頭髻を剪て首級代人と宣ひ其の髪を兼容ひ
 ねかと口説を定正喚禁めてる憲儀又よ思へ我管領の大職小在りるらう
 然しも命の惜るも頭髻を剪て敵小遞與さ上六先祖を辱め下見孫小

汚名を修る恥の上の恥るるを只潔く死す小不如と決れ憲儀聲を頻單て君
 忘れぬり秋昔建武二年冬十一月等持院尊氏將軍鎌倉小在り一時大
 塔宮の御事より後醍醐天皇逆鱗甚く義貞主と討隊の總大将小
 做されて官軍より發向とすや等持院殿驚に怖れて逆意るに證據小
 とをみづと頭髻を剪り錦小路殿並小當家の御先祖を切
 諫めり口口得思ひ久きを以て親姑峯竹下老官軍と戦破りぬりより竟小
 脚運を用を以て修へ今柳營義尚小至らせぬ小ゆるぎや然へ其比那脚頭髻の
 短髪を紛艾を近習外様の武士をも故意頭髻を短くを威其髻をせざらうと
 一束剪と唱へる風俗今改めを信る先蹤小非如今の難義の為頭髻を我
 前せぬとも脚恥辱小似く恥辱小あは支大功の細謹を顧む大礼の小讓と辭せ
 むとひ古語を何ぞと思召さるん只任用せぬねと説諭し目小向ひく



定正

〇〇〇



〇〇〇

敗將頭髪を切て
みづ首級小易

請ふと始小異るね。目頭と敬けく。まきで悲し請うと。听急相腹と斫せき。
我君仁義を旨と志あゆ軍令不悖る小似たり。と公を葉四郎猿八の懐ぎ左右より
我と出く。俱小目と諫く公。小漢主物數多る。卑職者賢達て云云と意
見ハ鳥崎かきくひん。仁も不仁も敵。他が自殺の嫌ひあふ生拘りて
牽のり。今ゆら尋思まる。とつひ。又蝨く身と起して。走り蒐らき欲せしを
目。饒さ。喚禁め。卒介まる。後岡範内。の舉い軍師大阪主の先見
あり。我其教。依る。欲も。憐る。要る。と論して。憲儀の答る。管領
み。頭。髻と。前。て。首級。代。と。情願。我君仁慈の旨。稱へ。其。美。柱。て
饒。走。然。ども。正。照。驗。る。て。我。私。小。似。く。影。護。り。故。和。殿。と。ゆ。て。と。い。ひ。
憲。儀。ら。ち。て。開。教。に。あ。る。我。身。あ。ら。む。孰。り。又。寡。君。俱。して。投。る。不。至。ら。我
身。も。髪。皆。剃。合。ら。ま。し。と。法師。あ。る。と。も。數。り。と。い。ひ。で。の。美。を。饒。して。よ。い。と。詩

内葉四郎と隊の兵。うち。困。て。を。羅。維。列。れる。當。下。定。正。の。又。助。友。あ。ら。向。ひ。て。登。
薪。六。郎。今。ゆ。ら。告。る。面。伏。れ。も。我。那。里。見。の。伏。兵。多。小。漢。目。堅。宗。と。ら。が。數。百。
敵。小。捕。網。ら。れ。て。免。る。べ。く。も。あ。ら。ゆ。と。大。石。憲。儀。の。意。見。よ。り。頭。髻。と。前。て。堅。宗。の
取。せ。且。憲。儀。の。我。小。代。り。て。敵。小。擒。み。せ。れ。の。ら。那。堅。宗。友。々。好。意。あ。る。者。あ。ら。
我。小。從。者。を。を。憐。り。開。一。隊。の。兵。百。名。許。と。り。我。を。送。ら。せ。て。造。れ。置。る。事。
汝。の。諫。め。を。听。く。我。身。單。あ。る。ま。よ。り。士。卒。を。喪。ひ。と。百。千。番。悔。て。及。汝。
亦。何。あ。ら。と。我。が。這。河。原。小。來。ゆ。と。知。り。那。大。山。道。節。の。言。兵。を。防。て。身。の。恙。多。
又。逢。ふ。と。を。迎。て。我。と。迎。る。忠。誠。感。を。あ。ま。り。の。り。賞。ま。し。と。只。願。言。と。己。さ。ら
を。助。友。の。嗟。嘆。小。堪。ぬ。愀。然。と。と。答。る。や。既。小。の。期。あ。ら。り。臣。等。が。前。言。不
幸。や。て。當。り。と。又。い。ひ。く。臣。等。が。今。宵。の。地。在。り。と。趕。來。ぬ。敵。と。防。れ。別。
仔細。も。い。ふ。今。日。の。順。風。の。異。る。れ。柴。浦。へ。斜。に。君。退。せ。ぬ。時。必。や。河。崎。へ。御。船。と

八代集 卷之六 十 文英堂書

寄させぬべけれと思慮り。一旦の道節が雄兵を防たぬくいとも里見の軍師大坂
 毛野も豫め的美を思ひけん他先多く伏兵を這頭お在せられければ竟不臣の援
 兵の徒事お作りしと今兼る悔いさよ然るを大石憲儀一騎を従ひま
 とも君辱めらるゝと死の臣死事と公苦節を思つゝ阿容て髪を前せまつて那身の
 敵おれと去れい言語絶する僻事をも今論言も亦益る他左もあれ右
 あれ恙もまを拜見の有と死を本意お解く殺しぬれと公を備へ敵兵の
 焦火の光お就く各告とある。鮫内兼四郎們の事の鉄びを舒く兼四郎一個の
 雑兵お持せる定正の両刀と助友お遞與しての事。いまも知らぬむ。寡君義
 成の仁義と宗とまをどりて。八丈の毎ゆえ物敷るぬ我隊長小湊目宗宗も
 至るまで皆軍令お従ふ。殺伐をいと功とせま。この故お虜小を敵の總大将を
 送りくあるに至れるん。他の亮查あゆむと又の助友差屋る色あり。少選も

返まを。目の听を頭と掉て下と定正主の我士卒とて送る糖と舐り糖
 及を。然虫涯るる者も徳も異議せ目物見先鮫内定正主の頭髪を
 夙く受合りね獲圍の這大石と牽立志。との事。事の勢已へる。定正連
 下を嘆息ある。やと兎と脱垂て引抜く。と首直し。頭髪を弗と剪
 垂れて遞與まを目の受合て。隨即鮫内兼四郎。雑兵二百名と分ち授け
 り。定正の送とを當下兼四郎の定正の佩し。兩刀と請ひ合て身の着させ
 去。又後圍様八も憲儀の兩刀甲冑と剥脱令と。腰索被て牽立れ。小湊目兼
 四郎も。擧言めらるる。隊の雑兵お分捕の馬を牽せ。主共侶お追立々々河崎
 る馬頭上を投て還りも。程小長。河原の風寒。八日の月。没果て路簡けれ。焦
 火を作ら。振照させ。連の去向をいせ。介程お定正の大石憲儀の意見お
 儘して。恥と忍びつ阿容々々と。頭髪を剪りて。敵お遞與し。辛く命を免れられも。

尚停囚の異るま。身寸鉄も帶るま。を。馬の乗せられ。敵の小頭人範内
 葉四郎が。一隊の士卒を送られて。津と索ねて。程の葉四郎も。亦隊の兵の蕉火致
 作らむ。鳥夜を照せる火光を見て。下流より。忽馬と。流り来る快船あり。其船五
 六艘あり。一艘毎に。環甲する武者。二十名うち。乗る。或の船を。推し竿を使ふ。
 波の上自由を。けん先。舟の内も。忽地の聲と。なりて。其里の。舟を。騎馬の一
 人の我君。扇谷殿。おどり。まき。徳の。巨田。新六郎。助友。中。ひんと。名告る。まら
 びく。定正の。歡。し。恥。と思つ。馬を。駐。め。見。る。原。來。助。友。恙。な。り。後。我。を
 汝の。援。ふ。よ。て。那。大。山。道。節。の。圃。を。辛。く。免。れ。て。大。石。憲。儀。と。僅。小。二。騎。来。り。路。を
 又。敵。の。死。と。告。る。と。皆。つ。助。友。の。船。も。立。止。り。主。の。身。邊。も。來。り。程。の。後。は
 船。も。皆。潜。着。て。岸。に。寄。り。わ。て。在。り。只。助。友。と。同。船。多。士。卒。の。相。從。を。主。の
 後。方。の。侍。り。と。定。正。見。つ。回。る。は。や。と。馬。より。下。立。り。程。の。石。尻。を。掛。れ。船

答るま。の。り。然。も。あ。べ。里。見。殿。君。臣。の。賢。而。て。仁。心。も。及。ぶ。も。あ。ね。も。敵
 藩。中。の。人。る。に。あ。ら。び。辟。言。我。父。道。權。の。如。た。い。當。家。の。大。丈。で。あ。ら。ま。今。番。の。敗。を
 豫。も。知。り。糟。屋。不。屏。居。して。諫。難。を。甚。麻。ど。と。論。ず。者。も。あ。ら。べ。遮。莫
 世。の。常。言。の。り。や。良。月。明。る。ま。欲。ま。れ。浮。雲。是。を。掩。ひ。蕙。蘭。敏。ら。ま。欲。ま
 秋。風。是。を。破。れ。り。况。や。船。中。流。の。横。り。て。渡。ま。由。る。者。と。縦。犯。諫。ると。も。
 大厦の。將。小。傾。んと。ま。と。一。木。の。ま。柱。に。あ。ら。和。殿。安。房。へ。り。去。り。異。日
 の。我。與。小。大。阪。大。山。諸。大。士。の。美。を。言。傳。ひ。ね。か。又。小。湊。生。吏。今。宵。の。好
 意。と。感。謝。小。堪。む。との。ま。宜。く。心。ぬ。ひ。て。と。の。定。正。も。見。え。り。詞。短。く。勞
 ぶ。を。葉。四。郎。の。唯。々。と。ま。言。美。あ。り。退。り。隊。の。兵。を。領。て。河。崎。の。馬。頭。上。を
 投。て。還。り。も。火。の。光。り。の。見。え。る。ま。助。友。送。り。目。送。り。卒。と。い。つ。兩。刀。を
 馳。く。王。君。の。ま。あ。ら。ま。定。正。の。面。を。合。り。り。と。腰。に。帶。て。登。り。新。六。郎。折

と来る汝の船りて、益々前岸へ渡りぬ。五十子の城は遠りて、意表と警え、
屋下をくぐりて、助友答く、否、五十子の御城は敵既攻捕りて、入替りゆひけり。
かゝる御城は、一個の兵法未煉の者なり。就中、大坂毛野の智術は長しとを以て、
く小那八、大士等の一個の兵法未煉の者なり。就中、大坂毛野の智術は長しとを以て、
料系、櫛高、大山道節、八君と、軒なり。毛野の徑、水野の艦を、柴浦、漕を、五十子と
畧りゆひけり。あつらん、御留守は、御田、馭蘭、二るど、かゝりて、他を防に
ぬ、水路は自家の敗軍と耳怯して、逃去たるを、いん、臣等が隊兵、今も猶一千
のひり、後攻とまげれば、御向、大山道節の、兵勢の兵と防に戦ひ、時、士卒と言
く、敷せり。思ひの、其甲斐、且河鯉の城は、造る、又、危而敵の進退、那
里の安危、向定り、徐、五十子へ還り、殊、御失る、下、御向、臣等、ハ、情
地、遠見の士卒と遣りて、君の脱れ、來、死道路と、現せし、よ、そ、風、知、初、河
崎、之、憲、儀、も、那、牛、馬、買、賣、る、馬、幾、疋、を、奪、合、せ、る、ふ、ろ、先、民、們、起

て立て、其難義、及せぬ。若、那、日、恭、微、り、せ、道、節、が、追、殺、ま、つ、り、欲、ま、
し、時、後、れて、及、ぶ、る、を、然、心、の、臣、等、が、援、兵、の、て、敵、の、伏、兵、小、漢、們、を、殺、破、り、追
走、り、各、て、必、や、辱、小、逢、せ、ま、る、べ、く、ら、い、今、の、千、萬、の、も、益、す、一、卒、河、鯉、の、城、
俱、一、ま、つ、ん、の、議、不、儘、せ、ぬ、を、言、丁、寧、に、諫、れ、定、正、の、心、を、去、り、恥、く、不、
答、ゆ、れ、を、姑、且、と、父、を、量、義、我、思、ひ、感、て、汝、の、親、道、權、を、久、く、遠、離、し、
の、る、汝、の、諫、を、聴、ぎ、て、去、の、大、敗、及、び、青、松、の、標、終、始、日、勿、ろ、今、日、臣、等、
再、度、の、送、迎、現、我、家、の、泥、累、を、脱、今、も、志、を、更、え、賢、親、を、侮、と、退、け、
會、稽、昔、の、恥、を、雪、り、も、欲、ま、左、中、右、中、も、從、さ、ん、河、鯉、へ、も、去、れ、と、い、ふ、助、友、
は、兼、と、馳、て、定、正、を、請、立、せ、つ、其、馬、を、乘、船、小、乗、せ、て、隊、兵、と、俱、前、岸、へ、渡、り、
又、定、正、を、馬、小、乗、て、那、身、も、俱、一、疋、の、送、れ、る、馬、小、乗、り、跨、り、且、隊、の、兵、と、相、從、
通、霄、路、次、と、い、は、れ、り、休、題、再、説、る、日、十、二、月、八、日、の、曉、天、不、烈、婦、音、音、の、料、ら、る、

那大茂林の澳邊を仁田山晋六武佐の柴薪船と燔毀せし時那身の又蝸く
 大洋に跳入りて燬を免れて浮つ沈つ程の音音の武藏の川畔で成長を
 甲斐ありて水戯自得の老婦ありしが約莫一里有餘る彼瀾を凌ぎ辛く
 大茂林濱に就くが天寒の日潮水没て且風波小揉く身は冷多脚疲果て我
 るあつた作りけん虫携りて身を起しとて僅に兩三歩憶を撲地と轉輾ひく
 開か休息絶えけり浩る処は這浦邊を漁戸們が今日ある那水戦の勝敗と心許なく
 思ふあつたん兩三人立出て澳の方を眺耳て立在むと平响許憶をも磯松の邊り
 音音が臥方と見せり訝りて皆立ちと又と見るふ六十有餘の老婦を全身潮水
 濡れ原來破船の浮死骸の今朝の這暴波打揚られ者者歎と推流元
 とを左右よりとるを合して曳起す動脈猶も似て身も亦温えけれ原來の死
 かり疾喚治よと聲を合して吸る胸を拵て介抱術と盡程音音のオオ息

眼と睜りをも動かせざるを得ざれば漁戸們のうらも涙且憐且勤りて軀を
 苦屋不吊りて地炕の邊り不臥をて隣人們の復を来ゆそ己が宿所遷りけり
 佐而家主の女房が屢柴を折焼給那身を温ると兩三時刻且貯藏の清心丹を
 薦る程小音音のやうな我小復りて愕然とと醒る如く身起り膝折布を
 主人夫婦に向ひてのやう料らけり御好意を一旦死し我身も今再生の
 欽ひありとる御恩で侍るか。と謝れが主人の女房と共侶不含笑て原來本腹を
 けり族柳媪の那里の人を問ひ答ふ然るるとなると難つやうなふり
 奴家の浦河の漁夫の母をゆる今日安房の洲崎の澳を水戦あつたを
 上總へ急要ある故未明に船を出させ傭船子と漕せし猛可風波吹巻
 れ流さるる我里のけん這頭の浦小奇き甘時哀や船の壘不碎せ舵工
 我身の暴波の底ともころを陥入りし我身の素是女良の延戸を少なりし

時ハ千仞の海の底小届りて貝採枝を生活せず申斐お沈む元自溺とせむ
 命を涯り自茶波を凌ぐ烟々幾町をけん稍這浦小烟々着々磯小登と
 思ひ一の開が儘息の絶け其後の事と知ざらと虚談実言うち交て昔を
 うら所く主人夫婦ハ然もをわらぬと共侶うち領くの疑言言語齊一答る
 や。現少かり一時延戸るる其船破れ身入水まで暴風今日の風波を凌ぐ
 烟々事とほ毫も潮水を吞されて甦生りと恙もるけれ柳屋小媪ハ那隨小這
 頭で命終る地方の厄會るる佳をり芽出たるる。今日ハ扇谷の管領
 様の安房の里見を攻伐の水戦の故小這頭の船文威徴れ久漁獵枝の便
 着るく比皆屏居て在ぬる。然もと御小憶りる。那里小媪ハ小見出た
 且もうち措れ近隣人們の多借と我屋小航て昇りと容れて看病も是
 一河の流を汲一樹の蔭小富小似る。唯此の這大茂林を浮屠家海苔

七と喚るる。老網漁で侍るか。是と一期の縁ありて。這頭ハ又來生とあふ必
 訪せぬ。彼茶ありともあせと夫婦送小真実立く飯と煮復しる。去は
 饌と薦る東道態小音音ハ欵大方る。懐小もるける長財囊と解粉と財
 祿の方金一片を取り出と。あ聊小ゆね命拾一歡る折乾とも見ぬひねとひ
 備小措れ。敗方金うち載て卒と取り取られ。主人夫婦うち合笑々。あ
 思ひけもる。佳をりの宿をこれと。是賜と何とせんと推辭むと音音と云云と
 薦めて敢饒さね。海苔七の屋やと欵受てうち戴く金子を女房小遞與けり。
 左右を程小下晡よ做りく。海苔七の音音ハのや。媪ハ浦河ハ還りあふ。
 又上總ハあふ。今日のあふ成りか。今宵の這里小明ハあふ。身昔手ハ
 延戸るれ。二里有餘の暴風波路を洞然も漏れきりけん。腹痛患ハ元潮毒を
 けん宿さるともけり。あふ。このハ亦女房も俱小留る。懇態小音音ハの感謝



八代将軍御代

十五



八代将軍御代

堪む。其の忝くはるか。尚暮あ程もゆるえ。奴家と俱入水せ。備航二のふ倣り
 け其亡骸の這濱邊に流寓するも。奴家の徳幸ひ。身の温り地炕火も。
 帯衣の乾き。其頭へ出て見。来てんと。瞞め。主人の妻。脚羊草履
 借受。脚引掛立。出れば。海苔。七の女房。も。越。来。ま。ま。喃媪。と。喚。ふ。而。聲。を
 歩捨。歩と。と。め。り。く。出。け。り。悠。而。音。音。の。單。身。残。る。夕。陽。小。片。光。明。を。澳。を
 眺。め。安。ら。ぬ。肚。の。裏。思。ふ。や。う。約。莫。今。日。の。水。戦。の。大。阪。主。の。謀。り。如。く。寄。隊。の
 及。て。火。攻。せ。ら。れ。て。血。み。て。倣。り。ふ。け。ぬ。然。も。敵。の。總。大。將。定。正。主。の。備。免。れ。て
 城。小。還。ら。ぬ。怒。れ。無。し。て。三。個。の。保。質。妙。真。刀。自。と。曳。る。單。節。の。殺。され。ん。我。身。今。幸。ひ
 再。生。する。甲。斐。あ。り。て。那。里。小。潛。入。と。を。以。て。二。個。を。極。令。便。直。欲。得。と。胸。の。も
 程。小。洲。崎。の。方。より。流。れ。る。寄。隊。の。殘。船。一。艘。あ。り。是。則。別。艦。を。寄。裏。小。寄

隊の副將。上杉朝寧の隊の從兵。他們の洲崎の圍戰敗れて。朝寧。大。山
 道節。射。落。され。又。那。每。の。印。東。明。相。荒。川。清。英。も。小。數。捕。れ。其。他。の。皆。降
 了。と。道。節。允。さ。ま。結。紐。ら。せ。命。を。助。て。推。流。さ。る。其。艦。を。あ。け。れ。ば。殘。兵。約。莫
 三。四。十。人。あ。り。他。們。の。今。料。ら。ぬ。も。五。十。子。近。に。這。浦。小。艦。の。寄。り。と。飲。べ。も。身。の。背
 小。結。紐。ら。れ。て。皆。重。索。と。掛。れ。ら。る。這。容。小。と。阿。容。々。々。と。城。の。入。り。さ。ま。が。艦
 より。出。難。し。一。個。の。老。媪。の。這。水。際。小。立。在。け。と。見。出。し。ぬ。兩。三。個。の。老。兵。が。最
 面。る。小。聲。を。き。て。を。喃。媪。と。呼。ぶ。這。頭。の。者。る。我。們。の。今。日。の。水。戦。敗。れ。て
 敵。の。為。小。生。拘。ら。れ。と。辛。く。を。脱。れ。來。れ。る。れ。も。皆。這。儘。を。五。十。子。の。大。城。へ。還
 了。か。こ。り。の。這。索。を。解。た。て。と。瀧。の。音。音。見。え。り。て。を。料。ら。ず。便。宜。を。得。り
 と。思。ふ。心。と。色。あ。い。さ。ま。艦。の。遺。遺。り。立。寄。り。て。左。見。右。見。々。含。笑。て。開。解。と。解
 べ。れ。ぬ。尚。連。累。と。せ。れ。ぬ。崇。も。あ。ら。争。何。の。也。と。供。る。を。大。家。穿。た。さ。否。と。何

らの崇あらん。今我門が這索と解くと上小忠節を異日賞禄を賜ふを疑
 いで解はねか。なよとくと思ふ音音の胡意従ふを異日の賞禄を何せ然
 らぬ奴家の情願あり。獨女と五十子の大城の奥へ炊爨せしめあるは他が上心
 許る。奴家も俱して賣らる。今其索を解き候え。公を老兵もうち听て開き亦
 要あり事な。敗軍の我門が老女と俱してられや。と推辭むを音音の冷笑ひて
 去る。外を馮心ぬぬ奴家の退然とふ。との捨て立去らる。大家ややと喚
 停り開き短慮之領てゆるる。疾せよと云ふ音音の猶も推言せ。艦の纜
 會延て汀渚の松木結び留れ。残兵も動揺々々と艦より立つ程音音の
 先兩三個の索とる。解捨れ解れ。老兵も海へ甲と解け乙も亦解れつ解れ
 つ各各両自由ありけり。登時又老兵もが約束られ。這媪を伴ふ。其
 あり。然れも這媪をして俱く白く入ることを許さる。艦中戦立。脛看脛

衣中。那の男装をきて黄昏時うち紛らる。俱く大城へ入る。看外。若
 る。とくを大家諾る。躬て音音不身甲をきて且戦笠を戴せ。後より
 見つ前より見ゆ。通雄々々武武者態。哉物足らる。我門も大刀器械を敵に
 捕られて腰空しを争何れ。見只益識と戦幟を照驗し。名告をせ。必城門を
 開れんを候くと散動ぬ。音音を後方へ立せ。五十子を投て走りけり。有徳一
 程。大阪毛野胤智の洲崎の澳の水戦。敵艦も火攻して。躬方全勝りけり。
 猶五十子の城を抜て。妙真曳。軍節を極ひ。令んと逸早く。其隊の頭人小森。但
 一郎高宗。千代丸圖書介。豊俊浦安牛助。友勝木曾。之介。季元。等と。三千の雄兵
 二百餘の快船を。順風。儘漕走らる。波上自由也。疾と宛月の免の流を逐ふ。異
 る。下下。哺する。時候。大茂林浦。未まけれ。船と水際へ就さる。見れば。磯松。小維
 と。一箇の戦艦あり。原来。那孫火を免れる。敵兵。又。逃去りて。這里より。城へ還り見

と思ひつ佐と前直見れば那残兵ありあらずん。二十四個の仇武者毎五十子の方へ
集ひあも。他們の必這艦より出城へ敗軍を告んと急ぐるを精しく高宗豊
俊を招き寄々意衷を示して計策を授けられた。高宗豊俊は得て其隊の雄
兵二十名と俱那艦を棄措れる。敵の笠識と戰艦を半手合ひり身不著る
岸へ登り那残兵の後を跟々程小既ちて黄昏る。且朝寧の残兵們去向を
急ば見ゆる者も我衆をうち交る敵ありとも知ざりけり。却説伴の殘兵們俱不
五十子の城へあらず正門の橋を立集合る聲高やく喚るや。什麼御内人達あり
稟は是は安房の水戦敗れ辛と脱れ來る副將軍と名の御隊の兵多。某
甲某ひ名で火火急の注進ひて。蝸く御城門を閉じて。異口同音に呼門へ這里を
守る城兵們のうら敷馬に快楯より其毎の形状を差覗く御方の戰艦を立識と
身不帶る者も。且其名告る姓名も比皆是相識る同士のれ。黄昏るれも毫も

狐疑を這隊の頭人菲見利金太士卒下知して正門を閉ざれ。那殘
兵們のうら敷音音も俱内へ入る背に従ふ高宗豊俊隊の二十個の雄兵を推
續は相入りと。嗚呼昏るれ誰も他も答る者も。當下件の殘兵們老兵を
前へ立せ。蹠つる井が中老兵多。利金太は向いて。思ふも似ぬ
今日の敗戦御方の及て衆艦を敵へ火攻せられ。誰一人も免る。副將軍を里
見防使大山道節射て落され。千尋の水底に倫とあひぬ。然れ那隊の勇
士も火を焼れ水に溺れ然る及敷れ生拘れ。免る者あると。開が中老小可
毎の堅を摧れ鏡と磨れ大刀器械も皆折られ。免るもあらず。一と。あらず艦を
漕退け。惜るぬ命を有り。い。の。を。御留守達。告稟を思ひ。只副將
軍の。老館。不在。火水。為。不。亡。秋。敷。れ。知。る。由。敵。の
必勝。來。り。逃。る。を。好。く。長。く。驅。て。當。城。を。推。寄。る。御。用。心。わ。れ。と。詞。急。迫

大傳山昇長百一六 十八 文英堂藏

あり異口同様示合せ已分非と節と俱不許れ城兵皆が驚れ父のやん非見
 利金大胆と淡しつ眼むが像く眼を睜くそを安んぬ事ふをあれ疾箕田殿不告
 知し諸門の隊配り要緊するんとふ不士卒心を得て走ると二の城門三の城門諸
 隊の急を告ぐ當城と與り守る其田取蘭二圓通を孰し駭噪さるん敵の
 旗も不見を落度とる者るのさりと取蘭二罵勵して其隊の小頭人們と
 共侶不だ隊配を倣え程小城中猛可放火の者あり守屋より其火發りて又蠅く
 城樓の燃ゆる烟裏の敵兵の其兵幾人ぞ知を胡歩乱行々城兵們を
 中る不儘せて所付き刀尖鋭く聲高や若們知を里見の軍師大阪毛野が
 先鋒の頭人小森高宗千代九豊俊る不在りあ不在りと名告被け相喚りて
 四下と靡るを大刀風暗さる鳥り城兵皆の敵の多少を知らず右往左往迷
 ふて敷る者もさるりける當下里見の士卒們夙正門をうち開き守屋の邊りの

敷る馬の絆と斫断々々馬二三頭牽出と高宗豊俊不跨まれ残れる馬も
 相り不怖れて正門の橋と葛直お渡して遠く馳去れ城兵の度を失を頼れ鬼
 正門より逃る者も多れ這隊の遂に敗れける然る処大阪毛野胤智の浦安
 友勝木曾季元と共に三子有餘の隊兵を率て那殘兵の迹を限り五十子の城
 進ぐ程小城内猛可息劇しく忽馬とて起弁る兵火と俱小城のより放馬二
 三頭這方を投て馳來ぬと毛野の蠅く先鋒の士卒不下知して馬を捉駐させ
 馳て其身と友勝季元等の騎馬不ある諸兵を勸め短兵之急不推寄て城の正門不
 乗入るれ非見利金大隊の兵母も防余由る第二の城門の基を敵と柱けり是
 より先列の婦音音の那殘兵うち交りて輒く城入り一時日既暮され躬方の
 高宗豊俊が二千個の隊兵を領て紛れ入りとてのまに知ねどいれ地真曳る單
 節の在処を去りて極い歩便りも欲得と逸早く紛れて深く潛び入て這里那那里

う。たふぬ。程。城兵。猛可。罵。謀。敵。既。不。逆。寄。と。正。門。の。剛。才。攻。捕。され。那。頭。
欲。と。索。る。程。不。城。兵。猛。可。罵。謀。敵。既。不。逆。寄。と。正。門。の。剛。才。攻。捕。され。那。頭。
人。の。名。不。逆。寄。と。安。房。の。軍。師。大。阪。と。然。て。は。這。城。保。ち。け。宅。眷。を。敷。も。る。疾。
退。ら。る。と。叫。び。東。西。へ。走。る。者。の。多。く。言。向。ふ。く。も。あ。ら。ざ。り。け。音。音。の。奥。へ。紛。れ。
入。る。程。不。給。事。の。女。房。も。良。賤。尊。卑。の。差。別。を。外。面。投。て。感。ひ。智。を。某。を。反。映。と。
見。々。向。々。遣。違。し。て。猶。奥。深。く。入。る。途。不。送。る。眉。尖。刀。一。枝。あり。是。究。竟。と。合。場。て。
披。ま。つ。立。り。奥。の。間。男。女。争。ふ。聲。あ。け。り。原。る。不。這。城。内。の。河。堀。殿。と。喚。做。さ。定。正。の。
母。あ。り。け。り。年。齡。六。十。許。る。又。式。部。少。輔。朝。寧。の。妻。と。親。姑。姫。と。喚。做。ま。る。是。の。
此。京。師。を。某。甲。中。納。言。の。息。女。り。と。定。正。近。曾。と。下。り。朝。寧。を。妻。せ。け。り。今。茲。の。
十七。八。の。女。あ。ら。む。心。間。嘗。不。深。摠。と。侍。て。立。た。の。蘭。奢。衣。裳。の。重。の。臥。た。狐。貉。を。
袖。中。に。冬。の。夜。も。猶。暖。く。夏。の。日。も。將。涼。く。錦。の。上。花。を。添。る。樂。不。耽。れ。と。雪。
中。小。炭。を。贈。る。貧。民。の。情。を。知。ら。ず。三。食。の。掛。を。列。ね。桂。を。新。し。玉。を。炊。く。幾。の。侍。

め。ま。え。た。へ。う。あ。あ。か。か。富。貴。の。身。を。あ。れ。今。城。陷。り。圍。破。れ。敵。乱。入。り。ま。ま。の。
妾。前。不。ゆ。り。後。不。從。心。信。る。富。貴。の。身。を。あ。れ。今。城。陷。り。圍。破。れ。敵。乱。入。り。ま。ま。の。
恩。顧。の。老。黨。傳。給。の。女。房。も。何。里。あ。げ。ん。在。る。と。き。け。河。堀。殿。と。親。姑。姫。の。出。る。の。ま。ま。
う。の。對。ひ。も。あ。ら。む。い。ふ。せ。ん。と。なる。不。せ。ん。知。を。共。侶。と。し。泣。く。在。甘。の。城。兵。火。係。の。あ。ま。
を。く。左。で。も。右。で。も。免。れ。な。命。を。今。ゆ。惜。ん。と。只。の。儘。刀。を。伏。て。死。天。の。逆。旅。の。相。伴。
ん。と。ま。あ。く。短。刀。合。揚。て。念。佛。唱。る。兩。聲。の。細。る。心。の。歎。息。を。あ。ら。俱。不。刀。を。後。放。を。
既。あ。ら。う。と。と。を。ん。ら。け。り。有。悠。一。程。不。妙。真。鬼。の。單。節。の。義。不。這。城。内。不。保。質。捕。
入。れ。ら。れ。奥。在。る。一。室。不。在。り。身。の。憂。ろ。し。小。就。て。亦。心。不。知。る。立。日。音。か。上。と。の。あ。く。と。思。
の。ま。然。し。も。人。只。問。難。て。做。事。も。多。く。早。一。暮。を。程。不。る。日。黃。昏。時。不。及。び。城。中。猛。可。の。
噪。だ。起。て。里。見。の。軍。師。が。逆。寄。し。て。正。門。へ。既。不。破。ら。れ。と。罵。る。聲。の。多。く。言。向。ふ。く。と。思。
質。不。守。の。頭。人。大。石。憲。重。の。家。臣。あ。り。け。り。那。朝。時。枝。太。郎。天。岳。餅。九。郎。等。の。あ。ら。
雜。色。奴。隸。も。咸。逃。去。り。其。頭。人。の。在。る。と。き。け。妙。真。鬼。の。單。節。等。の。一。ひ。ら。ら。ら。

挑放せし河堀殿も親姑姫も其の推方りて泣て原來是汝等と思ひける敵
 方の間諜見せありけるよと事向ふ詞も果敢拵る四下不响く空銃ふ大家耳を事れ
 吐嗟とるり駭つ俱の前を信と見る隔の襖戸蹴用に見れぬ両個の猛者あり
 是則別人を亦那朝時技太郎天雷餅九郎をわける但見る打拵一對る
 身其肚甲眩釘脛衣戰笠眉深小髻昨反らく訛聲高く喚るぞ知は是意
 中人建豫の目算粗語を館打負ひゆる里見の軍師の逆寄せれて風落城の
 程もろ我情人建を擁護して且大塚の城の退くと思ひり素ねあは見えざるそ
 故ありけれ奥殿入り多く何事やらん這里の造と我門の主張亦更りし河堀殿と
 姫上とのまも出もゆをきて這里不在あり奇貨る哉兀自里見の降参しく這二
 方を献らざる咱も兩個の城の主の傲るも易かるべし開七和女等と妻あして日る
 夕る長視る部語云牡丹餅で殿を打る榮曜の上装信を悪及ふ死る

疾引立て一緒のる美備詩の語と下の字といひ可愛き反憎さも百倍に入る
 敷殺しと然而企後重見不降り心も否と答をよと両聲俱の苛めく喉は暗
 ぎ準備の銃砲又響くもあく念直しく銃杪其方推向れ吐嗟と敬馬く妙有と
 俱の曳る多胞姉妹其身を看み河堀と親姑姫と背あて戦れぬ聲慌々々
 後を奪あ和主們のをも借りて這二方を俱りまわらんや況筋を死不為遙奔矢
 銃をりて權をも誰ん在て徒ふえとらをも果敢技太郎と餅九郎の脚踏鳴ん
 眼を腫ら聲又昔ぐ女流小似はる大胆無敵其美ると思ひ知せ覺期をせよ
 罵りて火蓋を鑽らんとせ程後方小唄ふ一個の雑兵忽地聲を震立て白物を
 と喚禁れ敬馬首ゆる枝太郎が枝果敢多く眉犬刀細項一と甘えらて軀の控
 と仆れは是れ駭く餅九郎も俱に見る程もあむ又只件の雑兵が入る眉犬
 刀の右の腕ををり奪と甘えらて持る銃砲共侶の忽撲地と雑落されて厨居の



五十子の城小
四勇婦大功を
成す

河堀家
おとよ
おとよ

おとよ
おとよ

權と平張けり思ひひるる今這幫助入らぬ救済且飲ふ奥の胞姉妹妙真共
 侶の聲をうけて料らうける危窮の助創抑身何人をも向ふ向ふ雑兵を戦
 るも脱棄るるをこれ見是別人を正音音音音音音音音音音音音音音音
 真奥の單節の満面矢多飲ひ先二口の短刀と輕小納め身と起し來り
 卒這方へと請薦林音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
 拾し這城内小潛入り特所所以あるれも開る後こそ告げり既小躬方の
 全勝也水路の閉戦の多る大阪主の一隊の雄兵當城推寄奉て正門の既
 敗れと告げ妙真奥を多る多る飲ひ先二口の短刀と輕小納め身と起し來り
 在る両夫人の定正主の奶々君と新婦君中を多る多る飲ひ先二口の短刀と輕小納め身と起し來り
 多る多る程小我竹料ら多る多る飲ひ先二口の短刀と輕小納め身と起し來り
 乱を利と做さ不忠の本性新奴家姉妹を挑むも火銃をもて權せり防ふ

術のあり一折り身武者打紛多る多る件の人若を推果あり今小肇武
 勇の掙に愉快を多る多る告げ音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音音
 御は奴家の里見の一家臣姥雪代四郎が妻音音音音音音音音音音音音音音音
 ら當城を攻徵をもと人も但君の側る侍人を鋤除ん為の御達を苦しめ多る多る
 然れども這里小在する軍兵の乱妨も測りが多る多る權且御園へ多る多る誘ふ
 廣重其の河城殿目と推拭多る年來仕る女房們へ已う自然感逃去り有徳瀬立
 り者へ反て敵の妻嫁子兒を伴れ鈍多る多る託め親姑姫も小潛然と泣沈
 る立難ぬを音音妙真奥の單節の耐心め却後園の那方小見ある茶亭へそ
 俱しおけり姑且して給事の女房の聊忠心ある者十名許返り來り河城殿と親姑
 姫を去る小雑色とむり二人多る斫殺され俯さぬの那二方の見えぬわらわ
 驚且且怕れて又外面退りけり介程小大阪毛野が先鋒る小森但一郎高宗千代丸

圖書助豐俊の敵の頭人葦見利金太門が逃ると迂々二の城門の士卒と馳て攻戦
 へ。城の頭人箕田取蘭二兵頭細阪四郎布留川後市力を裁せて隊兵を糺し
 せんと先途と防戦ふ其兵四五千あるをり。左右より攻め破れし毛野の馬上は是を
 見て弓矢前刺さく標と射る矢局錯を馭蘭二の肩矢丁と射られぬ堪む
 馬より落おけり。是を驚く城の士卒の備を乱と激と退くと透さる細入る先鋒の
 頭人高宗豊俊のへり之浦安友勝本曾季元士卒を薦めて三七二一の攻伏
 攻伏乱入る然りも列し大刀風城兵防ふ力多。才小金塔児取蘭二を肩小楸
 々後門投て吐と頼れて逃走れ細阪四郎布留川後市心を走も逃走る躬方の
 士卒も誘引れて後門より落亡け。徳而大阪毛野胤智一舉小城を攻落し
 馬を本城小乗入る敵一人もあるとせられ權且あつて高宗豊俊を召て
 我聞當城の定正王の後母河堀殿と朝寧の夫人親姑姫あり又妙真貞の軍節の

上も心許る。夙く其在処を去れて宜く勦り慰むべ。但那五婦女子のるる女流の都て
 罪を必る驚き一と一所小集合て扶持せ。且宝藏と倉廩の我を自封せ下和殿
 們もよく心を属て士卒の乱妨を教言め。と急せ高宗豊俊相心して馳て士卒を
 部して城中隈るく巡察を。の時自餘の士卒の庭上小籠を焼て二の城門を守り
 けり。徳而を初更の左側。小本林但一郎高宗の其隊の士卒十名許と俱小音音妙
 真を得て来て。来由を胤智小報しけり。當下毛野の先妙真ふら向ひて什麼妙真刀
 自費の軍節の恙るや音音媪の艦を遠されて。這里に在ら下と思ひ小針脛
 衣小身甲の故をあらめ。甚麼を。と向へ妙真先答るふ。あふ在りける程の。又技
 太郎餅九郎が曳の軍節不掛想せると始て且の。徳而河堀殿と親姑姫の自
 殺まぬんとする。時憶も參り合せて其死を禁めり。折枝太餅九が密に來て
 主家の乱を已が利りて。刺曳の軍節を挑る。従ふれば火銃と權とて之の通り



八代傳九郎長四郎

六



八代傳九郎長四郎

文彦堂藏

程不料らば音音の刀自の幫助よりて万人を撃果一ひい六俱不件の両柱の
 御連を勅慰稟して園の茶亭不退をゆり一五十一と速知まれば音音の亦大
 茂林の澳邊を仁田山晋六が柴新船を計りて焼亡せし事の始より那身の海没
 火を免れて烟にて大茂林濱に造り折海苔七夫婦死を救れ事の趣を告げて
 又のや折る扇谷の殘兵の咸結紐れて還り來ぬ其艦流れ寄る他を漫
 哄誘して這城内に紛れ入り不身並不勇士達の推續して當城に攻入りひいと知
 さりてこの刀自と曳の單節を索ひて救出さす思ふの故小事の紛れ不後堂深く
 潛び入り今妙真刀自の告げあり如く件の兩個の牙人を眉尖刀不被け并除は
 河堀殿と親姑姫と茶亭不俱ら共侶不事の鎮ると俵ゆりと報るを毛野の列々
 と所果て感して已まむ憶さむと拍鳴りて果さる勇婦の進退孰れ忠義さ
 ざらん做し沿て各皆妙人河堀殿と親姑姫の惴りと自殺ある我兩館の御仁慈

も徒事とるまを長く怨を結れ不那死を極ひまらせし時不て其功後華
 賞をべし我も見參まげれども女儀不夜分の憚りあり先後堂不返り入れて刀自
 宿直く是を衛りね事の起本不保質不捉れ刀自の王と做り反々兩個の
 保質を捕獲し不用意也造化精妙亦奇不縦定正主殘兵をり當城不
 推寄來て復さす欲さると河堀殿を城樓不升して那罪と責て拒る我兵
 僅不百人なりとも他何ともまらざるといひ高宗を見りて守城の準備を示し折
 り千代丸圖書助豊俊の落後れる綱阪四郎と庖人廩人們を生拘り結紐り
 不難兵不牽せ又當城不給事の女房十名許を捕禁めて腰索被けて得る來
 隨即毛野不報てのや這者毎の迷惑して猶城中不在り捕捕て其姓
 名の箇様を言詳不許を毛野不聞き鞠問する綱阪四郎がや小可
 二の城門を攻破れし時河堀殿と親姑姫を杖出さると思ふよと逃ゆり

ら。這毎と共侶の立願れて在りける。見出されて捕捕れぬ。女房們も俱にお
 ぞ。衛敵亂入り及とゆえ。時朋輩等と共侶の慌々走り。御母君と姫上と俱
 走らぬ。其と思ひかぞ。我們十名の立離れて。後堂へ還り来りける。二方のをりまを
 斫れ。兩個の雜兵の屍骸あられ。怕れて又外面へ走り。猛者達を趕れて捕れ
 たり。とをさる。陳まると。毛野の所。點頭て。是の男力女の其田取蘭二の
 立勝り。聊忠心ある者。俱に縛縛の索を釋して。妙真音音。豊多單節と
 相共の兩個の女君仕へる。其頭人の浦安生。二百の老兵を従へ。宜後堂等
 る。但細阪四郎と廩人們の事の猶思ひあれ。儘中して屏居め置ね。その
 餘の事の儘と。言送もる。宣示せ。友勝の妙真音音と俱に女房等を受合て
 老兵許を従へ。のそ。後堂へ赴け。豊俊。又細阪四郎と廩人們を并儘
 隊の兵。毎々牽立させ。外面投て退りける。恁而當晩子二刻。左側小湊。目堅

宗の後岡猿八範内葉四郎と俱に毛野が進退に従ひ。既去去向を知り。其
 生口大石憲儀と隊の若母の牽せ。五十子の城小来りければ。毛野の則城の正
 廳の局の内へ召入れて。對面を登時。堅宗の衛河崎矢口の。河原定正主僕
 僅に二騎道節が虎口と道れて。那里津津りを討めける。折目。伏兵一度小起。矢
 場小停。小ま。り。小定正主僕。悲を請て。言葉。果。く。も。あ。れ。則主僕の願。任
 せ。定正の。自。前。て。首。級。小。換。言。頭。髪。受。合。り。命。を。允。し。且。事。の。照。驗。の
 為。小。憲。儀。と。領。て。來。り。故。小。定。正。の。範。内。葉。四。郎。一。百。個。の。隊。兵。を。分。り。他。を。送
 ら。せ。と。報。小。葉。四。郎。又。巨。田。助。友。が。快。船。小。ち。乗。り。沂。り。來。ぬ。小。逢。か。ぞ。則。助
 友。が。小。宗。任。し。却。定。正。を。那。隊。小。遊。與。て。河。崎。小。か。り。來。り。堅。宗。と。一。隊。小。わ。り。け。は
 事。の。趣。を。演。述。せ。又。堅。宗。の。回。諜。見。ど。り。風。知。り。け。道。節。が。一。隊。と。り。定。正。を
 趕。敷。け。折。巨。田。新。六。郎。助。友。が。僅。小。五。百。の。隊。兵。を。り。道。節。を。防。戰。ひ。事。の

光景をうつる隨小告ゆり。當下毛野の儼然と憲儀から向ひてやれ大石生和殿
 親子の管領家の元老小して其君と輔けてり。賢良なる事と要せんと
 那惡の逢ふ。坐名非理の大兵を起さる。罪を隣國と畧す欲は故の十萬の
 衆ありとのへとも小敵小敷敗らる。終小其君辱められ其身も俘囚の做らる
 とも我君里見殿に仁受禮智の心をり。只其暴虐を防ぐの今全勝の勢
 乘して人の地を畧し人の城を捕ある。我當城の船を寄し其惡と懲さる
 其の故小嚮小我伏兵をり。管領と矢口河原小綱籠れも胡意饒しく虜小做さる
 是則我君仁義の本意なり。然しも大職小那人を楚囚小做さると思へり。和殿
 其の美を知りてやとのれと憲儀答へ由る。黃壁と嘗る啞子の像く口を合り
 眼と睜りてのまゝ。竟小沁る。姑息と聲細る。軍師我実小罪あり枉に放
 免を願ふのと。勸解れ毛野の小溪目小悠々と分付く。却憲儀を牽立させく。

そ升ぐ儘獄舎へ遣りけり。倭而又毛野の小森高宗小談をや。我憶ふ大石天
 塚の城を守る士卒等の管領大く敗北し。當城も敵小捕れと傳へる。必や
 駭怕し。城を棄て走るべし。然らば那空城を我より守らざり。野武士山賊の
 寓者ある。和殿も木曾之助と共侶の一千の隊兵を將。夙く那里へ赴く。
 箇様々々小相計ひたると具ある。高宗と其の美義のゆ
 但し大塚の城より。忍心岡あを要緊する。其の美誰何と請問へ。毛野を荒介
 とうち大く然る。忍心岡の城も道節が捕る。御前大山の定正主と追代
 去小巨田助友が援兵小柱られ。遂小敷漏せし。然ると今當城を我逸早く
 拔れ。大山必性起て。忍心岡へ推寄て。那城を捕るるべし。介らば那里の敵城の
 他小譲らば。思ふ木曾生も這意をゆて。俱小大塚へ推寄り。當城の敵の棄
 置れる。冷飯処々小ある。腰戰飯を送る。高宗と急せ。高宗季元敬服

友勝等と案内あり。則後堂へ赴きて河堀殿と親姑姫を見参る。其事男女の禮を乱さる。詮者所定の正の侮人小惑のされ。今回の軍旅の非を擧げて義成の寛仁を説示し、且其やう臣等當城の艦を寄し、敢殺戮を言ふと云ぬる。其口官領の側る侮人等を鋤除して両家の和睦を揣らむと然其間兩御達を安房へ移し、其のうまげれば水路の風濤の怖れをいせられ、猶其の儘るもけり。其のうちに、這里小作の妙真音音、其の母の節は皆忠信貞実なる。其母の御陪堂の事。其の他年来給事の女房も、いかに必御心安らるべしと言可寧く慰めて、是より後朝夕不安を訪する事も、且生物の内中、尙人もあれ。這者毎を釋脱して、庖厨の事を做さる。河堀殿と親姑姫の三食も生平小易ら。又妙真音音も、里見殿の仁心を言ふ觸れて、説いて定正主の愆を云々と論ぶ。河堀殿の親姑姫も、是よりしてを稍覺く。左中右の侮人等の不忠を憎み、いける有徳れ。毛

野の士卒小下知して城の四門を守らる。千代丸豊俊浦安友勝小漢堅宗援。圓猿八等と頭人及小頭人とも介程小隣里近御る。御士豪民莊客の里見の仁政と其茶ふ者招き、取来て請ふて軍役不達なく、欲する者千をりて數ふ。い。あとの大阪軍威の揚馬也。草木も靡く可る。次の日毛野の馬小うち踏り。二三百の隊の兵を相従へ。城外四境を巡り、民の訟を所定む。御の故老們尊。食壹將木して、飲び迎る。悠而、日比と喚做を御盡處、一座の小道場あり。けり前門破れ傾て、松の垂枝掩れ、鼓の音近く、夕讀經の聲。其の御導人毛野小告て、ある日比の宝傳寺と喚做したる。其舊院中、いかに。寺内小扇谷の一忠臣河鯉權佐守如の墓、いかにを毛野うち、馬を駐め。寺内を見入れて、原來是要ある人の墳墓、其の卒立寄く廻向をせむ。其の馬より下立ち、馳て、找入る程、士卒の都て鎗を建馬を敷糸、門前在り。二の

老兵従々。去園小唄門へ一個の沙弥。其まて。うら坂馬たる。面色。をそく左
 見右見く。那里より。尋ね。毛野の自杖。向いて。咱當。是里見の軍師。大阪毛野
 胤智。當寺。河鯉權佐。翁の墳墓。あり。と。少知。拜奠。の為。小立。より。あ。い。く。を
 案内。を。憑。心。ひ。つ。と。の。り。て。沙弥。の。阿。と。心。く。遠。く。又。内。入。り。ぬ。姑。且。と。間。道。菜。と
 浅。青。磁。の。香。爐。と。右。の。推。方。へ。左。の。引。提。て。復。遠。く。出。く。あ。り。誘。と。な。り。り。小。庭。木
 履。を。穿。つ。先。小。立。け。れ。毛。野。の。引。ま。き。本。堂。の。傍。多。空。都。婆。壁。あ。り。外。小。造。れ。花。の
 丹。楓。も。る。り。け。冬。の。柳。の。樹。の。下。小。只。一。塊。の。土。饅。頭。わ。り。一。箇。の。空。都。婆。と。建。之。所
 の。い。ま。其。墓。表。の。石。わ。り。是。る。ん。河。鯉。翁。の。墳。墓。多。く。そ。沙。弥。の。菜。を。布。に。香。爐。を
 居。て。備。ふ。立。く。懐。より。鈴。舎。出。く。う。鳴。う。傷。を。唱。念。佛。く。那。廻。向。を。を。知。助。け。登
 時。毛。野。の。後。方。る。老。兵。も。と。見。え。り。我。今。故。人。を。祭。ら。ま。欲。ま。る。小。極。可。の。事。わ。り
 祭。文。の。儲。り。文。の。花。之。言。の。実。心。只。方。寸。の。懐。ひ。と。速。て。誠。を。盡。さ。ら。七。霊。も。受。ん

我。松。を。笑。ひ。る。せ。と。の。い。ひ。親。を。改。め。墓。小。向。ひ。の。香。を。焼。き。跪。き。合。掌
 あり。聲。朗。小。吟。誦。あ。け。り。其。意。忠。信。や。て。那。死。を。悼。と。其。言。簡。約。小。く。那
 子。を。憐。ふ。誠。心。誠。意。と。亡。霊。を。慰。め。夜。臺。の。眼。を。覺。ま。足。下。祭。畢。り。退
 け。バ。沙。弥。の。又。先。小。立。客。殿。へ。案内。を。あ。り。茶。を。看。り。る。と。程。小。住。持。の。老。僧
 立。出。て。毛。野。小。對。面。く。姓。名。を。問。來。意。を。尋。る。毛。野。又。告。る。と。初。の。如。く。且。り
 ぞ。那。河。鯉。翁。の。咱。當。一。面。の。交。り。他。の。扇。谷。の。孤。忠。や。と。反。て。枉。死。の。悼。り。其
 子。孝。嗣。亦。是。忠。孝。る。も。反。く。奸。黨。小。誣。られ。死。刑。小。逮。び。免。れ。れ。も。猶。幸
 る。て。存。亡。今。小。詳。る。を。我。今。五。十。子。の。城。小。在。り。民。の。憂。苦。を。解。き。欲。を。知
 那。親。子。の。如。死。の。忠。義。を。後。世。小。傳。む。の。る。を。速。小。墓。石。を。造。建。く。祠。堂。料。を
 寄。附。せ。下。且。規。小。當。寺。の。頗。頽。破。及。分。宜。く。修。復。致。せ。下。其。財。用。の。形。の。如。く。明
 城。内。之。遞。與。を。下。あ。是。を。あ。る。ゆ。ひ。と。言。叮。寧。小。解。示。し。硯。を。請。き。自

證文一通を書寫りて取られ。住持ハ歎ひ受攸め。却りやう。宜是御意の如く何
 鯉生の異義ハ枉死の折一旦城陥り。當寺の檀越るねも。其子佐太郎主親の
 屍骸と昇入れさせ。安葬の儀を薦められ。則執置れ。管領家へ憚り。其を
 墓石を建ざり。小里見殿施主ハ微り。我寺をも修造。幸甚。くひるれ。
 仰るるゆひ。心と応て。又茶と看り。果子と薦め。管待り。後而次の日。宝傳寺の
 住持ハ二の徒弟と從。五十子の城。友勝豊後。小件の書を言
 示して。住持ハ幾東の金子を取らせ。修造を。守如の墓石。寺も程
 る。造り更て。昔の如く。修造を。守如の墓石。寺も程
 不平。小思ひ。小毛野。是の善政。歎。是後。話説。畢竟。大阪。智
 五十子の城を捕り。又道節。進退甚。摩。又下の回。解分。と聴ね。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十六終



